湘南・鎌倉地区

湘南　茅ケ崎　鎌倉　茅ケ崎北陵　藤沢西　鶴嶺　七里ガ浜　寒川
茅ケ崎西浜　大船　湘南台　深沢　藤沢工科　藤沢総合　藤沢清流

平成 25 年度　湘南・鎌倉地区大会

日　　時　　平成 25 年 10 月 9 日（水）　13:00～16:00
会　　場　　茅ヶ崎市民文化会館小ホール
参加者数　　300 名
内　　容　　研究発表
　　Ⅰ．県立藤沢西高等学校ＰＴＡ
　　「西高防災教育 ～育てよう防災意識～ 」
　　Ⅱ．県立茅ケ崎西浜高等学校ＰＴＡ
　　「トイレ環境維持に向けた取り組み ～みんなの笑顔のために～ 」
　　講演　　石野 郁也 氏　（実践女子学園理事長特別顧問）
　　「生きる知恵」

＜研究発表Ⅰ＞　県立藤沢西高等学校ＰＴＡ　「西高防災教育 ～育てよう防災意識～ 」

1. テーマについて

藤沢西高等学校のPTAは、東日本大震災をきっかけに本校の防災対策と生徒の防災意識について着目しました。アンケートを実施したところ意識の低さが見えてきたため、PTA活動を通して防災訓練を取材し、学校と対話する機会を持ちました。今回の活動の経過と結果を発表します。

2. アンケートについて

まずはじめに、実際に「東日本大震災」を学校で体験した当時の生徒と先生にアンケートを行いました。その結果、藤沢西高の現状とこれからの防災について学校と保護者とで話し合う機会を持つことができました。大震災から3年が過ぎ、今現在どれくらいの生徒が防災について考えているのだろうと疑問に感じアンケートを実施しました。学校が緊急時のためにと作った「引渡しカード」ですが、「知らない」と答えた生徒が46％で、約半数の生徒が「知らない」という状況でした。防災備品のある場所を「知っている」と答えた生徒が16％、防災ダイヤルのかけ方を「知っている」と答えた生徒も19％と、とても低い値となりました。日頃の学校での生徒の防災意識が低いということがわかりました。この結果から、いざという時大変困ることが予想でき、学校と保護者で何かできることはないかと相談し、2つの企画を立てました。

3. 意識向上活動①

第1回防災訓練にて、避難訓練だけの活動の予定でしたが、防災についてより深く考えてもらうために今回初めて起震車体験を行なうことになり、その模様を取材し起震車体験をした生徒・先生にインタビューをしました。感想を聞くとともに、災害時のために家族で話し合いをしているかなどを問いかけ、これからも話し合いをしていきましょうと呼びかける活動をしました。訓練後に学校、藤沢市役所災害対策課の方との懇談にも参加させてもら

い、近隣の防災状況と災害時の注意事項を教えていただき、まずは家族との連絡方法・集合場所を話し合っておくことが大切であるとのお話を聞くことができました。

4. 意識向上活動②

第1回防災訓練の時間を特別に「生徒の防災意識向上」の活動として防災講話の時間に使わせていただきました。藤沢西高等学校第八期卒業生で、現在藤沢消防局にお勤めの伊藤弘昌（ひろまさ）さんにご協力をいただいて「東日本大震災に伴う緊急消防援助活動について」というテーマで、日頃の防災もふまえた講話を実施しました。伊藤さんは実際にご自分で行った被災地での救助や、捜索活動の様子を話してくださいました。大災害が起きた場合、食糧不足・断水・停電・ガスの停止・ライフラインの寸断が起こります。そのため普段から防災倉庫に発電機・水・簡易トイレなどの備蓄を準備し、一人一人の普段からの心がけや災害の知識が必要である、とのお話でした。災害時、消防や警察だけでは対応できない所もでてくるため、「助けられる立場ではなく、助ける立場にも回ってほしい。高校生の若い力は大きいんです。」と言われていたことが印象深かったです。講話終了後にアンケートを行ったところ、「救助活動の大変さを実感した」「災害の怖さを改めて知った」「防災について家族と話し合おうと思った」「人との絆の大切さを感じた」「助けられる立場ではなく助ける人になりたい」「私にも出来ることあるかな」など、確実に生徒の意識に変化がみえました。

5. 防災用品の配布

講話終了後には、防災意識を持ってもらうためにPTAから生徒全員と先生方に防災ホイッスルを配布しました。ホイッスルは、中に ID カードが入っており、住所・電話番号・血液型など個人情報を記入できる仕組みになっています。災害時、自分の居場所を知らせることができるだけではなく、日頃から身につけておくと不審者対策にもなります。こちらもほとんどの生徒が防災ホイッスルを持ちたいとのアンケート結果がでています。

6. まとめ

今回の活動を通して、地震災害の救助の大変さ、自然災害の怖さを実感しました。日頃から家族と災害時の集合場所、連絡の取り方の確認の必要性を強く感じました。幸い藤沢西高等学校は高台に位置することから、地震による津波の心配はありませんが、海岸側から登校する生徒も多く、自転車通学や電車・バスを利用している生徒もいます。そのため、帰宅困難になる確率が高いと思われます。そして今現在、学校は耐震工事の関係で広域の避難場所に指定されていませんが、近隣から避難される方が来られる可能性もあります。この2回の防災意識向上活動を機に、西高生一人ひとりの防災に対する意識を高め、近隣の方々の手助けとなる助ける立場になってほしいと思います。今回の活動は藤沢西高広報誌「藤沢西」に掲載し、防災について学校・生徒・保護者に再度考えてもらえるようにします。

来年度、我が藤沢西高等学校も40周年を迎えます。今まで引き継がれてきた元気で楽しい西高の良さを大切に、社会と地域の一員としての自覚を持ち、進化していくことを目指します。

講評　＜藤沢西高校PTAの発表についての助言＞　　**鶴嶺高等学校 校長　小澤伸高**

はじめに、藤沢西高等学校PTAの皆様、ご発表の大役お疲れ様でした。どこの学校も発表となると、テーマで悩まれることが多いかと思います。そうした中で、藤沢西高等学校では、平成 20 年に校舎の耐震化の必要性が指摘され、現在も防災対策として耐震工事が着々と行われている現状がありました。また、その間に東日本大震災が発生したことで、全国的に防災意識の高まりがあり、神奈川県でも過去の関東大震災や東海地震への備えとして、学校と地域とが連携しながら防災への見直しと強化を図っています。具体的には、備蓄食料の拡充や地域と連携した防災訓練などの実施だけでなく、学校によっては、体育館での宿泊体験などを積極的に実施し

ているようです。しかし、これらは県をはじめ、市町村や学校が主体となって実践しています。今回、藤沢西高等学校では、PTAの組織として子どもたちを守るため、生徒の意識調査や防災訓練に積極的に関わっている実態をテーマとして発表していただけたことは、PTA活動の在り方として一石を投じた内容であったかと思います。

今回の発表では、防災に対する生徒の意識調査をすることで課題を明らかにすることができています。学校が作成している緊急時の引渡しカード、防災備品倉庫、災害時の伝言ダイヤルを知らない生徒が多かったこと。この基礎データをもとに、課題解決に向け大きく二つの取り組みを実施することができています。一つは、第一回防災訓練での取材をとおして生徒との関わりを持つことによる防災訓練の活性化と振り返りが効果的に運営できたこと。起震車の生徒の反応が大変印象的でした。次に、第二回防災訓練では、卒業生を活用した防災講和を実施することで意識啓発を図り、アンケート調査をすることで更に効果を高めることに成功しています。今回のように、PTA の方が親身になって取材やアンケート調査をすることで単調になりがちな防災訓練等が学校や家庭においても貴重な時間を作り出すことができることがわかりました。最後の感想にもありましたが、今回の取り組みが生徒たちには忘れてはいけない防災意識の啓発につながったと感じさせてくれました。最後になりますが、創立 40 周年を契機に更に藤沢西高等学校 PTA 活動が盛んになることを期待します。

＜研究発表Ⅱ＞　県立茅ケ崎西浜高等学校ＰＴＡ

「トイレ環境維持に向けた取り組み ～みんなの笑顔のために～ 」

茅ケ崎西浜高校で昨年度よりスタートしました、「トイレ環境維持に向けた取り組み」についてご説明いたします。私たちは、今回の研究事例発表に向けて特別委員会を組織しました。特別委員会は、本部と各委員からの代表および先生方を含めた25名で構成されています。ここ数年、本校では校内美化が重要な課題の一つになっています。このため、今回の研究発表を機に、校内美化活動の強化に取り組むことになりました。私たちの関心ごとは多岐に渡ります。代表的なものとして次のようなことがあります。校内に群生する松の木の保全に関すること。学校の近隣海岸の環境維持に関すること。また本校は、全校生徒約1000名のうち800名以上が自転車通学です。その自転車通学マンモス校としての交通安全への取り組み。そして、本日ご紹介する校内美化に関することです。私たちの活動のきっかけは老朽化したトレイでした。築34年を迎える学校のトイレは造りが古く、本校特有の理由が重なり老朽化が進んでいました。ベニヤ合板で作られた個室の壁、スチール製の扉、タイル張りの床、そして和式の便器です。海岸が近く、潮風が舞い込むためトイレの扉はさびついています。床面には風に運ばれた砂や松の葉が舞います。トイレ清掃の時は、それを洗い流すため、ホースで水を撒きます。排水性が悪くいつまでも湿気が残ってしまうため、木製の壁や個室の扉は腐食が進みます。便器の汚れも重なって、お世辞にもトイレ環境が良いとは言えませんでした。そして何よりも問題だと感じることは、このトイレが学校のグラウンド脇にあり、外部の方々も使うということです。「学校の顔でもあるこのトイレ環境をなんとかしたい！」これが私たちの活動のきっかけでした。グラウンド横のトイレに限らず、校内随所のトイレ環境を改善したい。私たちの多くが、そんな想いを抱えていました。トイレをきれいにするために、私たちは何をすべきなのか？学校のトイレを心地よいところにしたい…そんな想いを共有して活動をスタートしました。私たちはまず、トイレの実態を調査しました。特別委員会のメンバー20数名が、いくつかのグループに分かれて校内のトイレを調査しました。その結果は次の通りです。便器が汚れている、床に埃がたまっている、掃除用具が床置きになっているなど多くの問題が山積し、日常の手入れが行き届いていないということがわかりました。これらの課題は、大きく三つに分類することができます。便器や洗面台の汚れに関すること、扉などの破損に関すること、そして、清掃用具に関することです。私たちは、

自分たちにできることは何かという視点に立ち、汚れと用具について考えることにしました。これらの解決策を講じるにあたって、私たちは、トイレの清掃を実際にやりながら、清掃用具について考えることにしました。トイレ清掃は、特別委員会のメンバーを中心に、ボランティアや先生方にもご協力をいただきました。トイレ清掃の際にはどのようにすれば先の問題を解消できるかを意識しました。私たちはこのトイレ清掃を通じて、なぜ、日常的なトイレ清掃が継続できないのかを、物理的な側面と精神的な側面から考察しました。物理的な側面から見て気がついたことは次の3点です。トイレ清掃には、ある程度の時間が必要であること。トイレ清掃の方法が決まっていないこと。このため人によって使う用具がまちまちで、必要な清掃用具が整っていないことがわかりました。そこで私たちは清掃方法と清掃用具を見直すことにしました。この点が私たちの取り組みの大きなポイントになっています。一方、精神的な側面では、次の問題があると考えられます。それがトイレ清掃の「負のスパイラル」です。トイレの汚れがひどく、手を出せない状態であれば、そもそもトイレ清掃をやる気になりません。やる気がなければ掃除もやらず、汚れが蓄積されることになります。この負のスパイラルを断ち切る方法はいくつか考えられます。トイレの改修、あるいは業者に汚れ除去してもらうなどにより、この部分を断ち切る方法。ボランティアや部活動で動員を図り、定期的に清掃する方法でここを断ち切る方法があります。私たちは、生徒たちに自主的にトイレ清掃に参加してもらいたいと考えています。そのため、少しでもやる気を阻害する要因を取り除きたいということを念頭に置き、この部分に着目して、負のスパイラスを断ち切ることを考えました。ちなみに…トイレの清掃用具入れを開けてみると…こんなカンジでした…これではやる気がそがれてしまい、一気に戦意を失ってしまいます。私たちは、どんな用具が本当に必要なのかを考えました。いかに簡単に、かつきれいに清掃できるか、ということを重視し、様々な清掃用具の使い勝手や管理のしやすさなどを調べました。その結果、本当に必要な清掃用具は意外と少ないことが分かりました。木製扉の腐食を防ぎ、水を吸ったほこりが排水溝に詰まることを防ぐため、水を撒く方法ではなく、できるだけ乾いたままの状態で清掃すること。そこが大きなポイントでした。実は、今回の清掃用具の選別で不要になった用具は、これだけありました。これでもまだ全体の半分に過ぎません。この結果をもとに用具を見直し、最低限必要なものを厳選しました。以前は、煩雑だったトイレの清掃用具入れを刷新することができました。また、私たちが実践した清掃方法を簡単な文章で表現しました。清掃用具の収納方法を写真付きでわかりやすく描いた「お掃除はじめてシート」を作りました。このシートにはラミネート加工を施し、校内すべてのトイレに貼り出しました。その数週間後、生徒のみなさんにトイレに関するアンケート調査を実施しました。その一例をご紹介します。Q1：今までのトイレはどうですか？　Q2：トイレの清掃方法についてはどうですか？　その結果は以下の通りです。この結果から三つのことを読み取ることができます。まず、トイレが汚いと感じている生徒が多いということ。特に、女子生徒の割合が高いことが分かります。このことから、女子生徒の意見や関心ごとに注目し、それを重視した対策が効果的であると読み取ることができます。一方、清掃方法については、「良い」と回答した比率がわずかに高いものの、その比率が圧倒的であるとは言い難いものでした。このことから、新しい清掃方法をしっかりと定着させるためのさらなる施策が必要であると考えることができます。この結果を受けて、私たちは次の二つが必要であると考えました。まず、もっと生徒たちとのコミュニケーションをとる必要があるということです。私たちの活動を生徒たちにしっかりと理解してもらうこと。その一方で、生徒の要望や希望を聞く相互コミュニケーションが必要だと考えました。また、トイレ清掃の時間をしっかりと確保することも必要です。学校の授業体系は、生徒たちの多様性に対応した複雑なカリキュラムが組まれています。その中で、しっかりとトイレ清掃の時間を確保することも重要だと感じています。私たちにできること、先生方にもご協力をお願いすること、そして何よりも生徒たち自身で考えてもらうこと。三者が一体となった活動が必要であると考えています。最近、生徒会の自主的な活動も活発になっています。本年度の校内美化活動への参加人数も例年になく増えるなど、生徒たちの

関心も高まってきています。私たちは、用具と方法を見直すことに着眼し、トイレ環境を維持するための方策を考えました。用具や方法は、小さな一歩に過ぎませんが、この活動を継続して、トイレ清掃を習慣づけることにつなげていきたいと思います。

以上、今回の研究事例発表では、清掃用具の見直しに注目し、トイレ環境の改善に取り組みました。今後は、生徒たちが自主的に継続できる仕組み作りを考えたいと思います。 その一方で、家庭や職場のトイレ環境の変遷に合致したものとして、洋式化なども視野に入れ、心地よいトイレつくりを目指したいと考えています。最後に…今回の取り組みに関して、多大なご協力をいただきました先生方やボランティアのみなさん、そしてPTAの仲間たちに感謝したいと思っています。本日は、つたない内容ながら最後までご清聴いただき、ありがとうございました。

講評　＜茅ケ崎西浜高校PTAの発表についての助言＞　　藤沢総合高等学校 校長　増渕広美

今回の茅ケ崎西浜高等学校PTAによる取り組みは、トイレ環境という多くの学校で抱える難題に果敢に挑み、非常に効果的なアプローチで迫り、大きな成果をあげたすばらしい取り組みだと思います。特に、簡単で効率のよい、水を使わない清掃方法をPTAの皆様が実践の中で創り出し、そのために必要な清掃用具を厳選して各トイレに備えたばかりか、効率のよい清掃方法と清掃用具の収納方法をビジュアルかつわかりやすく描いた「お掃除はじめてシート」を校内のすべてのトイレに貼ることにより、それまでばらばらだった清掃方法を一新し、生徒の清掃活動の活性化につなげたことは非常に画期的で、多くの生徒が「これならできる」と意欲が持てたことと思います。是非、多くの学校に発信していただきたい貴重な取り組みだと思います。また、今回の取り組みが円滑に進み、実効ある改善にたどり着いた背景には、すぐに清掃活動に入るのではなく、まずは「トイレの実態調査」を行い、その結果を丹念に分析し「汚れ」「破損」「清掃用具」の三つに大きく分類したうえで「清掃用具」に着目した改善策を検討したことを発端とし、実践と研究を積み重ねたことにあると思います。さらに、そこに留まらず、事後に生徒によるアンケート調査を実施し、その結果から次に必要なアクションをすでに考えていらっしゃるとのこと。まさに今回の取り組みは、今求められている「RPDCAサイクル」（Research：調査、Plan:計画、Do:実行、Check:評価、Action：改善）に基づく取り組みであり、だからこそ大きな成果をあげられ、さらに生徒の自主性を喚起する持続可能な取り組みにつながるのだと思います。

今回の研究は、校内美化活動の活性化に向けた短期集中委員会である「特別委員会」を組織して、集中的に研究、実践されたということですが、このような機動力のある組織編制や実践ができたのも、それまでの充実したPTA活動が基盤にあったからこそだと思います。本日の発表の冒頭に紹介されたように、これまでも、PTA本部のもとに、学年委員会、広報委員会、成人教育委員会、環境整備委員会が組織され、年間を通して、学校行事への参画、生徒の交通安全確保、校内の環境美化推進、広報誌による情報発信等、生徒の学校生活を豊かにするための多岐にわたる活動をされてきました。その活発で充実した活動の様子が、写真を豊富に使った発表から伝わってきます。特に、自転車点検、登校指導、大規模な校内ペンキ塗りや清掃などは、一歩踏み込んだ非常にアクティブな活動です。このような日ごろの活動で培われたチームワークと経験が、トイレ環境の維持という難題に挑み、画期的な改善策を生み出す原動力になっているのだと思います。校内の環境整備の善し悪しが生徒の環境美化に対する意識を大きく左右します。ご存じのように、東京ディズニーランド・東京ディズニーシーでは、ささいな傷をおろそかにせず、ペンキの塗りなおし等の修繕を惜しみなく夜間に頻繁に行うことで、従業員や来客のマナーを向上させることに成功しています。トイレ環境というのは生徒にとって最も身近な問題で、その整備状況が校内美化でも大きな鍵を握っています。言い方を変えれば、トイレをきれいに保つことで生徒の使用

マナーや規範意識の向上が可能となり、校内美化に向けた大きな前進が期待できると思います。今回の「トイレ環境維持に向けた取り組み」は、その成果はもとより、単なるトイレの美化向上ということにとどまらず、保護者、教員、生徒が一体となった活動により、これからの社会を担う子どもたちの自主的な活動や成長につながる取り組みであることが何よりもすばらしいと思います。今回の発表で、多くの学校がトイレの環境維持について大きなヒントを得たことと思います。

＜講演＞　「生きる知恵」　　実践女子学園理事長特別顧問　石野 郁也 氏

1. はじめに

自己紹介　退職後、8年目。火野正平「こころ旅」～「人生下り坂最高」に共鳴しつつ、未だ社会との繋がりにこだわっている自分が居ます。まだまだ「明鏡止水」や枯山水の「侘び寂び」の境地に至っていません。今日はかつての教員時代を振り返りながら、また現職を通して日々感じていることを中心に話したいと思います。

2. 今の若者を取り巻く状況とは

昨今の風潮　仕事上、受験生や大学生と話をすることが多いのですが、「何が何でもこの大学に行きたい」、「この大学でこの勉強をしたい」という、至上主義の受験生はほぼ壊滅状態です。その一方で「就職に有利そうだから」、「自分でも受かりそうだから」とのことで大学選択をしたり、卒業後の進路でも「就職で一番重視するのは安定」というのが男女とも大半を占めています。でも、一見安定しているように思える人生設計も、実はその期待値が少しだけ高いだけです。もう一つの風潮が「ありのままを受け容れる」ということです。確かに先行きは不透明であり、世の中は決して安定していないことは事実です。若者とはでかい夢を描き、その実現に向けて必死に挑戦してこそ若者です。

ボーイズ ビー アンビシャスは死語になってしまったのでしょうか。シェル石油の創業者マーカス・サミュエルは 1871 年 18 歳の時、片道切符と所持金 5 ポンド（今の貨幣価値で 5 万円）を持ってイギリスから横浜へやって来ました。1862 年ロンドンでの万国博覧会をきっかけに日本の美術工芸が注目されていました。横浜に上陸した彼は湘南の地を訪れ、珍しい貝殻細工を目にし、貝殻を集めてロンドンに送り、それから得られた金を原資に石油の輸送業に進出し、やがて油田開発もおこない国際石油資本の一角を占めるようになりました。初心を忘れないために貝殻（シェル）を商標としました。

3. キャリア教育が目指すもの

進路指導からキャリア教育へ　「キャリア教育」という言葉は 1999 年に登場しました。望ましい職業観や職業に関する知識を身につけさせ、自分の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力と態度を育成する視点から日々の教育活動を展開することです。従来の進路指導は、学業成績によって進路を選択させることが中心で、業者テストの偏差値をもとに中学校や高校の卒業前に集中的に実施していました。キャリア教育の目指すものは、働いて生き抜く力を育成し、自分一人で生きていける能力を持たせることです。すなわち食べていくことに必要なお金を稼ぐために仕事ができることです。仕事とは他人から与えられるもの。信頼される人間になることがポイントです。そのためにはよりよい人間関係を構築することが大切です。

4. 人間関係を結ぶ基礎基本

人間関係とは何か　心と心のやりとり。キャッチボール。心はナマモノ、人の心は相手の態度で瞬時に変化し

ます。では人の心の原点とは何でしょうか。人は子供から大人まで自分を一番大事に思います。私たちは相手の自分に対する態度で自分は大切にされているのかどうかを判断します。子供にとって最も身近な社会人は先生であり保護者です。まず先生の役割とは何でしょうか。それは生徒一人ひとりの素晴らしい点を評価し、本人にきちんと伝えることです。どんな些細なことでも、虫眼鏡で拡大して褒めてあげること。欠点を暴き立てることではありません。子供たちは知識や経験も乏しいけれど、この先生は本物かどうか、口先だけかどうかを残酷なまでに直観力で見抜きます。侮ることなかれ、レントゲンで透視しています。大人も子供も、相手が自分を認めてくれると、その相手に好感を持ち、その人を信頼します。自分の人や物に対する態度や行動は、自分の心をそのまま映し出します。先生はクラスで自分のことを最も心に留め置いていてくれる、という生徒の思い込みの中で教育は成立します。これは厳然たる事実です。次に保護者の役割は何でしょうか。高校生(前期青年期)は自立に向けて巣立ちします。動植物から学ぶこともあります。「助長」「子離れ」も必要です。

5. 大切な12年間の学校教育

生き抜く力の土台作り　小中高の12年間は、知力・気力・体力の3つの土台を作る期間です。この間の基礎力こそ、自分の将来を切り開く原動力となります。では基礎学力を身につける秘訣は何でしょうか。学力は2つの柱から成り立ちます。一つは学習方法。好きこそものの上手なり。好きな得意な教科科目を中心に学習し、習慣化を図ること、得意な分野を先ず伸ばすこと。得手不得手があって当たり前、不得手なものは後回し。もう一つは学習に対する意欲と姿勢。手応えや成果が自信、自己肯定を生み出し、ヤル気を引き出します。間接話法やいろいろな手段を使って子供をさりげなく褒めることが大切です。高校生の心模様を理解することも必要です。「ハリネズミ症候群」という言葉があります。自分の内面を見せることへの不安や挫折感、他者との比較による劣等感、自己嫌悪感、自分の殻に閉じこもるというのは、高校生の時期にみられます。一方では他者への関心もあり、自己開示せずに他者へ接近し、踏み込みすぎて撥ねつけられ、自分の世界に逃避してしまうこともあります。
わが子をじっと見守ることが大切です。脱皮の時期があります。敢えて動かないという勇気ある姿勢、腹を括ることが肝要です。世間と繋がることで若者の育ちを太くします。すなわち、少々のことではたじろがない踏ん張る人間力を養うのです。若者が群れる、集団で活動する場面を学校だけでなく、地域全体で拡充強化する工夫が大切です。

6. うまくいかなかった時の自分とどう付き合うか

基本的生活習慣の確立とその継続こそ生きて働き抜く力の根源となります。人間関係における快適な環境とは何でしょうか。嫌な奴との共存こそ、むしろ快適な状況になります。私たちの祖先は四季の変化に富むこの風土で連綿たる生活をしてきました。特に気候的な特徴は高温多湿です。これにより世界有数の多雨地域となり、豊かな植生を育み、その恩恵を受ける中で人々は“サンズイ”のつく言葉を大切なものとするようになったともいわれています。清々しい・潤い・汗を流す・潔いなど。この伝統的な価値観の大切さを再評価すべきだと考えています。